

母性看護実習における授乳場面での学生の戸惑い

大沼珠美¹⁾、塩野悦子¹⁾

キーワード：母性看護実習、授乳、看護学生、戸惑い

要 旨

母性看護実習における授乳場面で、学生が感じている戸惑いを明らかにする目的で、母性看護実習を終了した女子看護大学生19名に半構成的面接を行い、記述的に分析した。面接内容は、学生に母性看護実習における授乳場面を想起してもらい、戸惑いを感じた体験について語ってもらった。分析の結果、授乳場面で学生は、〈羞恥心〉〈触ることへの緊張〉〈何かしてみたいが自信がない〉〈母子への横は入り〉〈気づかい〉〈無力感〉を経験し、これらのことから中心となる学生の経験の特徴として『居づらさ』が見出された。教員は学生がこのような戸惑いを感じていることを十分認識し、学生の戸惑いを理解した言葉かけや、戸惑いの気持ちが表出できるような関わり方を重視する必要がある。

Discomfort of Student Nurses during the Breast-feeding Stage of their Maternity Nursing Practicum

Tamami Onuma¹⁾, Etsuko Shiono¹⁾

Key Words : maternity nursing practicum, breast-feeding, student nurse , discomfort

Abstract

The purpose of this study is to investigate the apparent discomfort of student nurses during the breast-feeding stage of their maternity nursing practicum. Following the maternity nursing practicum, 19 student nurses were interviewed at the location of the breast-feeding using open-ended questions. The interviews were recorded and the resulting data was analyzed. The students reported embarrassment, stress related to touching, a lack of confidence, stress from disturbing the mother-child relationship, anxiety, and a feeling of powerlessness, all of which led to a feeling of discomfort. These results indicate that the practicum teachers need to recognize the students' discomfort, acknowledge its existence in a positive manner, and encourage the students to express their feelings.

1) 宮城大学看護学部

Miyagi University School of Nursing

I. はじめに

母性看護実習では、母乳栄養の確立を目指し、妊娠・分娩・産褥の各期において乳房のケアと母子への授乳援助を行っている。初学者である看護学生は、講義やビデオ、乳房モデル・新生児モデル人形を用いた演習等で事前に学習するものの、実際の授乳援助では、母子双方からのアセスメントを行わなければならない、母親の心理も理解し、退院後の授乳方針など教育的に関わることも求められている。また、助産師が行う授乳指導や乳房ケアの実際を、見学というかたちで学ぶことが多く、学生自身が褥婦のニードを満たすための直接的なケアを実施することは少ない。また母親への授乳援助では、「気楽にして優しい後押し」や「当たり前の心配り」など、気持ちに関わるケアも重視されている¹⁾ことから、授乳場面では多くのことが求められている。

また、納富ら²⁾によれば、多くの学生が対象者との関係や知識、技術面において、母性看護実習は他の実習より戸惑いが大きいと感じていることが報告されている。中村ら³⁾は授乳場面における学生の心の動きについて調査した結果、「授乳室入室時」・「褥婦からの受容感」・「乳房に触れた時」の学生の気持ちは、約3割の学生が実習初日に「抵抗感」を感じていたと報告している。

これらのことから、母性看護実習における授乳場面において看護学生が観察やケアを行う場合、何らかの戸惑いを感じているのではないかと考えられる。日頃の実習指導の中でも学生が戸惑いについて表出する機会は少なく、教員としても受け止める必要があるものとする。しかし授乳場面における学生の心の動きや戸惑いに焦点をあてた研究報告は少ない。

そこで本研究では、学生が授乳場面でどのような戸惑いを感じているかを明らかにすることを目的に面接調査を実施した。この研究により、教員および臨床指導者が授乳場面における学生の立場をより深く理解することによって、学生が授乳援助に前向きに取り組めるような実習指導に役立つものとする。

II. 研究目的

母性看護実習における授乳場面で、学生が感じている戸惑いを記述的に明らかにする。

III. 用語の定義

本研究では、次のように用語を用いた。

授乳場面 褥婦が授乳をする場面であり、分娩直後から入院期間中、分娩室、褥室、授乳室、あるいは指導室等で行う授乳と、乳房・乳頭のマッサージや搾乳、授乳に伴うびん哺乳・おむつ交換など、授乳に伴う一連の動作を実施する場面である。

授乳場面での戸惑い 看護学生が授乳場面において、受容あるいは対処できないことがらに直面した時に感じる、困惑・迷い・驚き等の不自由な感覚である。

IV. 研究方法

1. 対象

母性看護実習を終了したM大学看護学部4年の女子学生19名とした。

2. データ収集期間と方法

データの収集期間は、2003年6月～8月である。データは対象者への半構成的面接法によって収集した。面接は学内のプライバシーが保護される部屋で行い、内容は、学生に母性看護実習における授乳場面を想起してもらい、「授乳場面に同席して、戸惑ったこととしてどのようなことがありましたか、ご自由にお話下さい。」と、戸惑いを感じた体験について自由に語ってもらった。面接時間は約30分で、承諾を得てその内容を録音し、逐語録としてデータ化した。

3. 分析方法

データの分析は以下のようにグラウンデッド・セオリーアプローチを用いて、データの収集とデータ分析を同時に行い恒常的比較方法に準じて分析を行った。分析は、共同研究者と共に検討した。

- ① 逐語録から、授乳場面の戸惑いについての語りを抽出し、意味があると思われるものについて収束しコード化した。
- ② 意味の類似したコードに対して内容を表す命名をし、カテゴリー化した。
- ③ コードとしてあげられたものを元にデータの収集を行い、②で導き出されたカテゴリーと絶えず比較を行いながら分類した。
- ④ カテゴリーの特性を反映する全体へと統合し、カテゴリー間の関係を図に表し構造化した。

4. 倫理的配慮

対象者へ研究の主旨について文書を用いて口頭で説明し、協力を依頼した。同意を得た後も、いつでも面接を中断できること、面接で語られた内容についてプライバシーは保護されること、公表に際しては対象者の承諾を得、匿名性の厳守について約束し、その部分についても証拠として録音した。

V. 結 果

母性看護実習における授乳場面での学生の戸惑い

分析の結果、授乳場面で学生が感じていた戸惑いは表1に示すように、〈羞恥心〉、〈触ることへの緊張〉、〈何かしてみたいが自信がない〉、〈母子への横はいいり〉、〈気づかい〉、〈無力感〉という、6つの特徴的な戸惑いとして抽出し分類することができた。

1. 〈羞恥心〉

授乳場面において、学生が感じる戸惑いとして

〈羞恥心〉が存在した。その特徴として《自分が恥ずかしい》と《相手もきっと恥ずかしい》の2つが抽出された。

《自分が恥ずかしい》とは、女性にとって乳房は人前で見せない大切な部分だからそれを見ることは恥ずかしかった、目のやり場に困った、という学生の気持ちが戸惑いとして語られた。

「直接胸を見て、なんかこうずーっと、ここばかり見ているのがなんか、やっぱ、恥ずかしくなってくる、すごい最初目の置き場っていうか、視線のやり場に困った。」

「人の胸をまじまじと見たことはないですし、なんかそういうところで自分自身が、なんか恥らいみたいなものを感じて・・・」

「あっこの場所に入っているのかな、とか見ていいのかなって思ったんですよ。それがなんか、自分も自分の胸を見られるのがすごい仲のいい人か、お母さんじゃないとすごい戸惑うから、恥ずかしいじゃないですか。」

表1 授乳場面における学生の「戸惑い」の 카테고리

カテゴリー	サブカテゴリー
1 〈羞恥心〉	《自分が恥ずかしい》 《相手もきっと恥ずかしい》
2 〈触ることへの緊張〉	《きりだし方に迷う》 《触る加減がわからない》
3 〈何かしてみたいが自信がない〉	《教えたいけど学生だから・・・》 《応えたいけど学生だから・・・》
4 〈母子への横はいいり〉	—
5 〈気づかい〉	《自分が母親に不快感を与えているのでは》 《母親に気がつかってもらっているのでは》 《担当してない母親への気づかい》
6 〈無力感〉	《見ているだけで役にたてなくて申し訳ない》 《居場所がない》 《お母さんの方がうまい》 《助産師さんがいるから》 《子どもを産んでない自分だから》

《相手もきつと恥ずかしい》とは、学生が母親の気持ちを考える時に、自分が相手の立場で見られたら恥ずかしいはずだ、とと思っていた体験が戸惑いとして語られた。

「お母さんたちも（胸を見られるのが）恥ずかしいはず、って思ってたから最初はちょっと横目で見ぐらいの、あんまりもう、ばっちり見られない、見れないっていうか、戸惑っちゃって、」

「いやー、そんなことはないんだけど”って言うんですけど、（胸を見られることに）やっぱ、どこかでごう、抵抗あるんじゃないかなって言うのがあって、」

「恥ずかしさってないのかな、っていう方がすごく気になって（中略）やっぱ見られてて恥ずかしくないのかなあ、っていう心が、私の中にずっとあるので、多少は恥ずかしいであろう、って予想してる」

2. <触ることへの緊張>

乳房の状態をアセスメントするために触診したり、搾乳の援助を行うための乳房に触れる時の戸惑いは<触ることへの緊張>であった。乳房に触れる時の問題として、どのように触ることの許可を得たらよいか、また、どの程度力を加えてよいかわからないということから、《きりだし方に迷う》と《触る加減がわからない》という特徴が抽出された。

《きりだし方に迷う》とは、乳房の触診や、搾乳する必要がある時に、学生として、母親にどんなタイミングで、どのように声をかけてきっかけを掴んでいったらよいか、きり出し方に迷っていたことが語られた。

「（触ることを）こっち側から言い出すことがなかなかうまくいなくて、で、どういう風に話しかけたらうまくごう、もってけるかな、ただ触らせてくださいって言うだけじゃなんか、自分がそう言われたらイヤだしなあ、って思ってどういうふうに接したら、お母さんが“いいですよ”って、言いやすいかなあっていうか、自分も聞きやすいかなあっていうので、あーどうしたらいいのかなあ、みたいな感じになることも多かったです。」

「言い出すタイミングとか、すぐ、“おっぱい触らせてください”なんて言えないし、それはきつと褥婦さんもびっくりだから、だから、そういう自分が知りたいことの、ことに関する話題から入ってって、

なんか褥婦さんも心の準備っていうか、“触ってもいいよ”ってなるようにしたいとか」「ながれに乗れなかった。あつ、あつ、っていう感じで結局・・・もう、そんな時は、あつ、触れなかったで終わり。で、次また、触れなかった、で終わり。」

《触る加減がわからない》とは、乳房の緊満状態や乳汁分泌状態を把握する際、どのような触り方をしたらよいか戸惑いを語っていた。

「（乳輪部のマッサージで）どのくらいの力でとかは、やっぱり自分でやってみないとわからない部分とかもあるし、教科書どおりやってうまくいかないこともあるんじゃないかなっていうか、やっぱり、そういう演習とかもないじゃないですか。だから、最初が褥婦さんっていうのも怖いっていう、感じがありましたね。」

「乳頭も発赤があった方だし、そういうなんかごう、敏感な状態にある乳房を触るっていうので、こわごわと触ってしまった。」

3. <何かしてみたいが自信がない>

授乳の具体的な援助についての戸惑いは<何かしてみたいが自信がない>であり、《教えたいけど学生だから・・・》と《応えたいけど学生だから・・・》という特徴が抽出された。

《教えたいけど学生だから・・・》とは、学生だから知識や技術に自信をもてない気持ちが戸惑いとして語られた。学生は講義で学んだことを活かして援助をしたいと考えているが、実際にはやったことがないことをしていいのか、緊張してうまくいかないかもしれない、また褥婦の個別性に合わせた一番いい方法かどうか不安でもあり、うまく説明できるだろうか、母親の方が知っていたら聞いてもらえないのではないかと等、戸惑っていた。また、実際に援助する場では自信がないため、おろおろしてしまう様子も語っていた。

「授乳のときに、お母さんがうまくできなくて、あーもうちょっと、ごうやったらいいのかなって。学生だし、もしちょっと間違っていたら嫌だから、って思って、なんか教えたいんだけど言えないっていうのが、戸惑い」

「教科書の図で見て、文字に書いてあるのを実際やるとなると、やったことのないのをやるから、やっていいのかな、っていう気持ちもあるし、うーんなんか、

やっぱりすごい戸惑いは大きかったですね、授乳場面は特に。」

「(授乳指導をする時、相手に) 経験があると、あたしたちの意見って言うのは、結構聞き入れてもらえないっていうか教育とか指導っていう面ではすごいやりにくいなって思っ」

「授乳の援助するにしても、練習みたいな感じでやったことはあるけれども、本当にやったこととかはないじゃないですか、で実際にどうやっていいかわからなくてワタワタしてるみたいな感じなんで、うーん、あんまりお母さんとかにしているようなこともないし、で、そういうような、うーん、なんだかいのかなみたいな」

《応えたいけど学生だから・・・》とは、学生が継続して授乳に入るにつれて、母親の方から気軽に質問をしてくる、その質問に応えたい気持ちはあるが、どう判断してよいかわからず、困ったという戸惑いであった。責任ある専門的なケアをいきなり求められても困るし、訊かれたらどうしようという不安や、実際訊かれると困惑していた。

「ケア的なことを求められると、自分で、こう、経過があるので、そこできちんと答えられないかなあって思ってたんで、そういうことが訊かれた時はきちんと、先生なり、助産師さんなりいればいいと思うんですけど、そういうことは訊かれたらどうしよう、っていうのはちょっと困ってた。」

「(授乳の方針について) “どうすればいいんですかねえ” みたいな感じだったんで、なんか逆に、うん、そういう、そうちょっと頼られても困っちゃうなあ、みたいなところが・・・」

4. <母子への横はいい>

学生が授乳場面に入ることの母子相互作用への影響として、母と子の時間の邪魔をしていないかという懸念と母と子の中に入っていけない戸惑いの気持ちが語られた。

「子どもにお乳あげて、で、話しかけてるところで、普通にお母さんと話したりもしたんですけど、その子どもとのコミュニケーションもあるから、それにどうやって入っていいのかなっていうのとか。ツンツンってつついてたりとか、“今日はあんまり飲まないねえ” って言ったり。横はいいっていうか、入ってたりもしてたんですけど。」

「授乳してる時っていうのは、母と子の触合いついていうか、すごい一番近く感じられていられる時のひとつでもあると思って、あんまり話しかけるとせつかくこうやって触れ合っているのに、邪魔しちゃうんじゃないかっていう思いがあって、なかなか関わりづらかった。」

「母子異室だったから(授乳時間の) 赤ちゃんとお母さんが一緒にいる場で、うーん、どうやって声かけてこうかなって、・・・お母さんがこう、愛おしそうに話かけている場面で、その間に入れなくていうか、雰囲気の中に入れられないなって、思っ。」

5. <気づかい>

学生は受け持ち褥婦の授乳場面に入ると、さまざまな気づかいをしていた。それは、《自分が母親に不快感を与えているのでは》、《母親に気がつかってもらっているのでは》、《担当していない母親への気づかい》であった。

《自分が母親に不快感を与えているのでは》においては、学生が母親に対して言ったことで母親を不安にさせたり、不快な思いをさせてはいないかという、気づかいであった。

「やっぱり飲んでくれないんで、何でかなあ、みたいな感じで出されたときに、声はかけてるんですけどそんなにすぐにお母さんとしては、なんでだろうって、思っって、そのせいか、やっぱ笑顔、顔、顔つきとかが晴れなかつたりとかって感じがあるので、それで・・・、うーん、何か、逆にこうまた、自分で言った言葉に対しても、そのお母さんに対してよかったのかなあと思っってみたり」

「(部屋で授乳している時に) カーテンで仕切られて、1対1っていうか、1対1対赤ちゃんみたいな、その個人だけになっちゃうから、余計になんか、自分の行動とかもすごく褥婦さんに影響与えたりするじゃないですか、だから、なんかちょっとした言動も気になっちゃうっていうか、自分の、ここでこう言うのはまずいかなとか、ここでこういう仕草をするのはまずいかな、そういうのでも結構、戸惑った。」

《母親に気がつかってもらっているのでは》においては、母親は疲労が蓄積してきているにも関わらず、学生に気がつかって話をしたり、無理をして付き合っているところがあり、そのように気がつかう母親に対しての学生の気づかいは語られた。

「疲労度ってどのくらいなんだろう、っていうのが学生の受け入れがよければいいほど、母子異室で疲れてるのに無理してないのかな・・・学生のためって、いろいろお話し下さるので、余計に疲れないかなあ、と思って」

「お母さんもすごい疲れてて、日に日にすごい辛そうになってたんで、なんでだろう、お母さんもそれに私にすごい気をつけてくれてた部分もあったから、私（授乳の場に）居ていいのかなあってちょっと思った部分も、正直なところちょっとありました。」

《担当してない母親への気づかい》では、授乳室の授乳場面は、周囲に受持ち以外の母親も授乳しているため、母親同士の関係に配慮したり、授乳がスムーズに行えていない母親や、子どものことで心配している母親に対してどのように対応したらよいか困ったり気づかっていたことが語られた。

「授乳室で受持ち学生がいないお母さんは、大変だった時とかに、だれもいなかったりする時もあったことに、ちょっと戸惑った部分もあった・・・ちょっと寂しそうにしてるお母さんを見たときに、これでいいのかなって思ったけど、でも自分は何もできないって思った。」

「担当のお母さんとの関係は良くなっても、自分の子どもの心配をしている方が後ろに（いて、授乳して）いる時は、もう、後ろのお母さんが気にするような、話題には触れないでおこう、だとか、気づかってました。」

6. <無力感>

学生は授乳場面で、母親が授乳している様子を見ることが多く、できることが少ないため無力感を感じていた。無力感は《見ているだけで役にたてなくて申し訳ない》、《居場所がない》、《お母さんの方がうまい》、《助産師さんがいるから》、《子どもを産んでない自分だから》、の5つの項目から構成されていた。

《見ているだけで役にたてなくて申し訳ない》とは、授乳をただ見ているだけで、母親に何の役に立つことができない申し訳なさを語っていた。

「授乳を見ていて、もっと自分も、声をかけたり、なんかもっとできればまだいいんですけど、ほんとにこれとってできない、ただこう、居て、申し訳ないなって。」

「なんかこうしたら出る、とかっていう自信がまっ

たくなかったんで、ほんとに、申し訳ないけど見るだけ。」

《居場所がない》では、学生ではあるが、ただ見ているだけでできることがないこと、その場にいることを肯定できず、居心地の悪さから自分の居場所を見つけられないでいた。

「例えば援助をしながら、とかいいんですけど、授乳の場面だけをずーっとただ見てるだけでずーっと居るっていうのは、いいのかなって思って・・・苦痛っていうか、ずーっといると居場所がなくなるような、いいのかなって」

「なんか授乳にただ居るだけっていうか、いっしょにこう話しているだけでいいのかなあ、みたいな、そういうふうな感じでこう、うーんいいのかなあみたいな感じで、居づらっていうか、」

《お母さんの方がうまい》では、援助を必要としている母親でさえ、自分より上手にケアできることがあると知った時には、無力感に陥っていた。

「手伝おうとした時にうまくできなくて、お母さんの方が上手だったときには、もう、はあ、意味ないなあ、と思って」

《助産師さんがいるから》では、初産婦で、きめ細やかな指導や援助が必要で、助産師が常に側にいるような場合には、学生は同席していても、ほとんど関わることができず、その場に自分が存在する意味が見いだせず無力感を感じていた。

「初産婦さんってことで、助産師さんが結構つききりでいて、プラス私もで、助産師さんが声がけしてて、あ、私はいるの、か、みたいな、感じもあった」

《子どもを産んでない自分だから》では、出産や臨床の経験もないことから、知識も経験も何も母親にできることがなく、学生自ら救いようのない無力さを感じていた。

「子ども産んだ経験もなければ、臨床にも出たことのない学生っていうのは、ほんとにできることがないなあって思っていました。」

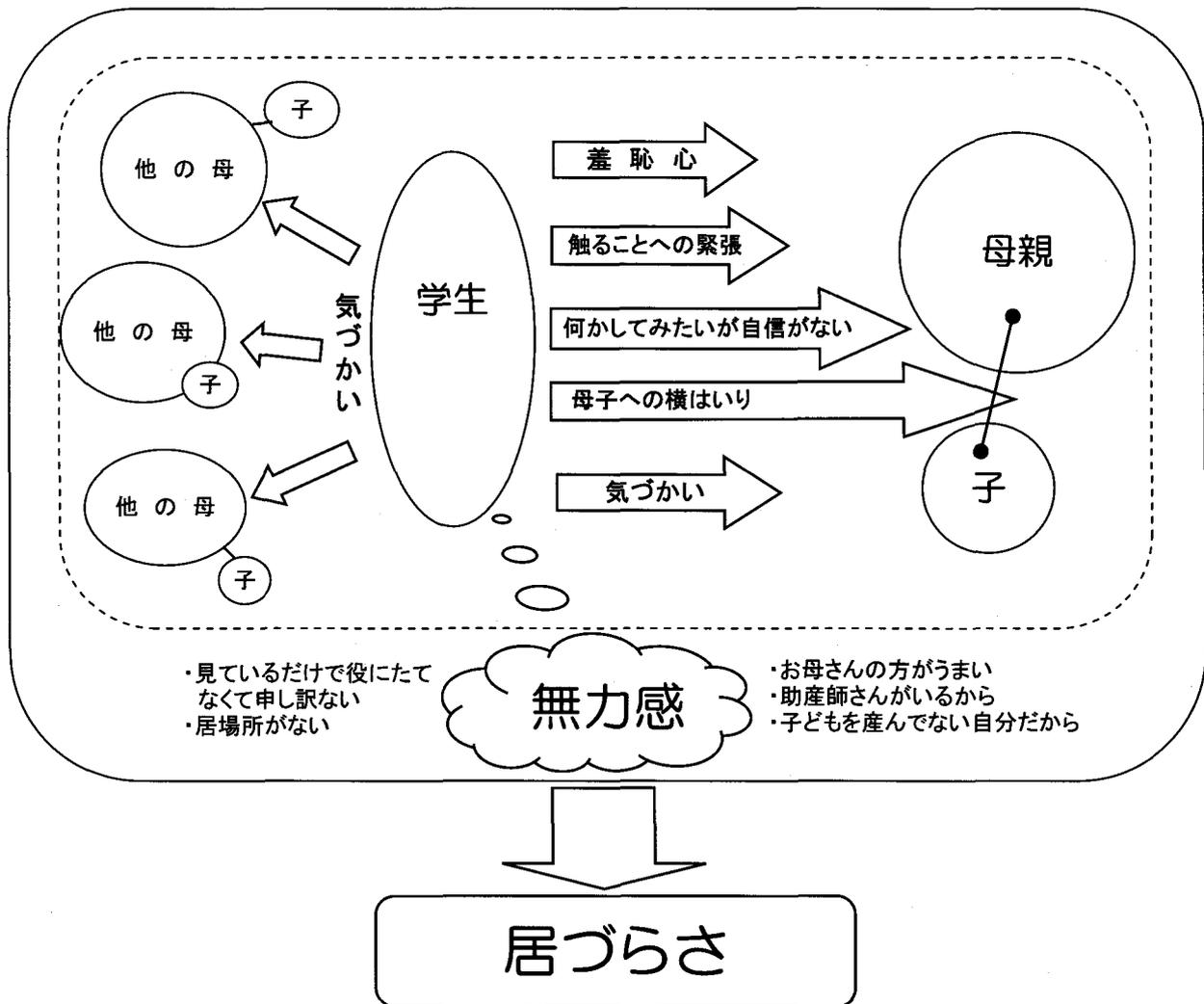


図1 授乳場面における学生の「戸惑い」の構造図

VI. 考 察

1. 母性看護実習の授乳場面で感じていた学生の戸惑い

結果から図1のような構造が導き出された。母性看護実習では他の領域と比べ、乳房や外陰部のケアなど、羞恥心に対する配慮が特に必要となる領域である。授乳場面での《自分がはずかしい》という戸惑いは、乳房を人前で見せるものではないという考えをなかなか払拭することができず、実習として観察や触診することの必要性は理解していても、実際に他人の乳房を間近に見てみると、恥ずかしくて目のやり場に困るという体験であると思われる。また、学生は《相手もきっと恥ずかしいはず》という戸惑いを示しており、自分も恥

ずかしいから、きっと母親も乳房を見られることに羞恥心を抱くはずであるととらえていた。自分の羞恥心を相手の羞恥心に重ね合わせることによって生じた抵抗感であるとも考えられるが、看護者として相手を理解するために、その人の気持ちを思いやることは大切なことであり、共感的理解ということ考えると、授乳場面でも、看護学生として人に対する共感的な姿勢が羞恥心を生じていたとも考えられる。授乳場面では当然の光景も、学生にとっては、まずこの戸惑いが存在することを十分認識するべきであると考えられる。

また、授乳場面での学生の戸惑いとして《触ることへの緊張》が非常に大きなウエイトを占めているものと考えられた。学生は乳房観察だけでも

羞恥心を覚えているにもかかわらず、学生として乳房の状態や乳汁分泌状態を把握するため、触診という実践に移らなければならない。触診するために母親に声をかけなければならないが、学生はその《きりだし方に迷う》状況に直面し、非常に緊張する瞬間だと受け止めるべきである。母性看護実習では、母親のセルフケアを目指すという特性から、授乳場面で母親自身が自分で乳房のマッサージ・搾乳などを行い、母乳を飲ませ、おむつを交換するなど、子どもの世話を含めた一連のながれを行うように関わる。そのため、学生は授乳の一連の流れが掴めないうちは、どのタイミングなら授乳を中断させずに声をかけることが可能なのかを判断することが難しく、その流れを止めることへの遠慮もあったと考えられる。学生は、触診する以前に緊張や遠慮を抱いており、授乳の合間できり出すタイミングをうかがうものの、なかなかうまくきり出せず、話の持って行き方や、どんな表現がよいのか、実に様々なことを迷っていたと考えられる。教員が一緒の場合、褥婦に触ることをきりだすのは簡単でも、学生ひとりで初めてきり出す時の戸惑いが大きいことを十分理解する必要がある。

さらに触診場面では《触る加減がわからない》という戸惑いが発生していることも十分考慮しなければならない。学生は初めて産褥期の乳房にふれるということで緊張状態にあり、疼痛・熱感を伴う乳房の触診では母親の感じる苦痛を思いやるため、力の入れ加減に躊躇し、遠慮がちにこわごわと触っている。母性看護では、乳房に限らず、分娩時の陣痛の強弱や産褥期の子宮復古の硬度を確認するために「触れて確かめる」ということを行う場面が多いが、どんな場合でも初めて触れる時の力の入れ加減はわかりにくいものである。学生は講義や演習でイメージを持つことはできているものの、触診という技術は経験を必要とする専門的技術であり、教員や指導者と共に行うのであれば、初学者である学生が実習の中で理解するには限界がある。実習において学生が乳房に触るときには、このように緊張し戸惑っていることを教員として理解しておくことが大切である。

褥婦の状態に合わせて授乳の手技を説明したり、

手を添えて授乳を介助したり、教育的に関わるという看護ケアの側面において学生が感じていた戸惑いは〈何かしてみたいが自信がない〉であった。学生は、授乳している母親に対して、学んできた知識を活用して、何か母親の役にたつことをしてみたいと考えていたが、《教えたいけど学生だから・・・》というように、実際には授業の知識と演習で練習してきた技術だけでは思うようにできずに戸惑った体験となっている。看護では知識の提供も一つの重要な機能であり、相手の役に立つこともあるが、授乳場面を始めとする母性看護実習では、相手の状況を十分に知るといった段階がより重要となる。その場では実践できなくても、学生の判断した思考過程を十分に配慮していく必要があると考える。

また学生は継続的に授乳に同席するに従い、母親から気軽に相談される存在になるが、《応えたいけど学生だから・・・》と、今の自分で応えられる範囲で応えようとするものの、自信をもって応えられないことも戸惑いとして大きかった。助産師が授乳へのアドバイスや乳房マッサージをしている場面に学生が立ち会うと、褥婦が助産師に抱く絶大なる信頼感を学生は感じとるにちがいない。それは褥婦にとってかけがえのない関係で、その意義を十分に理解することはできても、学生は自信をもって母親を援助することに躊躇してしまうのではないかと思われる。また学生は自分が伝える言葉の影響を考え、その後も母親をフォローできない自分の立場や専門的なケアが求められることの責任を感じ、母親へ応えることに慎重になってきたとも考えられる。母親の授乳技術をアセスメントし、補足修正のアドバイスを行い、不安解消の言葉がけを行うなど、母親のニーズと理解度にあわせた教育的な関わりは、高度な専門的看護ケアである。野口⁴⁾によれば、看護者が深い洞察を働かせて積極的にかかわろうと、母親に声をかけたり、卓越した専門的技術を提供した場合には、母親の母乳哺育のセルフエフィカシーは高まり、またこのような母乳ケアを受けた母親は、ルーティンケアレベルでの声かけや技術提供を受けた母親よりも看護者に対する信頼が強いことが報告されている。このことから考えても、初学者

である看護学生がその場で母親が納得できるように何とかしたいと思っても、母親が満足するような言葉をかけたり、授乳の援助技術を提供することには限界があるが、それでも学生は何かできることはないかと授乳に同席しながら考えていることを十分に認識していくべきである。

授乳場面での母子関係に関して学生が感じた戸惑いは〈母子への横はiri〉であった。授乳は母と子を結びつけ、愛着が発展する機会であり、母と子を互いに惹きつけさせる多くの感覚的・内分泌学的・生理学的・免疫学的・行動的メカニズムが相互に発生している⁵⁾とされている。学生は母子相互作用の学習から、授乳場面で行われる母と子の相互作用の大切さを理解していたため、それを尊重したいという思いと、同時にその様子を間近で理解したいという思いをもって実習に臨んでいる。〈母子への横はiri〉とは母子相互作用をよく知りたいが為、学生が母子の間に割り込んでいく、親子の邪魔をすることへの申し訳ない気持ちがあり、大切にしたいが邪魔をすることの葛藤としての戸惑いであり、母子相互作用を尊重していたからこそ感じた戸惑いであったと考える。

さらに、授乳場面で学生がさまざまな〈気づかい〉をしていることも戸惑いとして十分受け止める必要があると考えられた。学生はケアに自信がないため、母親の前で子どものケアを行ったり説明をする場合に、《自分が母親に不快感を与えているのでは》ということを感じ、学生はその場の雰囲気や母親の表情から、母親がどう感じているのかを読み取ろうとしていた。一般的に褥婦は情緒的に不安定な側面も持ち合わせ、特に授乳では神経質になることが多いが、学生にとってはその褥婦の不安や不快の反応が、自分に起因しているのではと受け取る場合もあることを本研究からあらためて知ることになった。また一方で授乳で余裕がないにもかかわらず、《母親に気をつかってもらっているのでは》と気づかう学生も存在した。授乳場面では、母親と学生という相互関係が存在し、学生が母親から気づかってもらう関係においては居心地のよい戸惑いと考えられるが、産褥で神経質になっている母親を気づかう側の学生は非常に戸惑いも大きく、授乳場面だけではなく受け

持ち実習全般に関わることもあるので、十分に配慮していく必要があると考える。また、授乳室での授乳場面は受持ち以外の母親の授乳に居合わせることにもなり、受け持ちではないが無視することもできない心理的距離のとり方などに対して《担当してない母親への気づかい》があった。これは教員自身も学生指導をしながら考慮し、声かけをしている場面ではないかと思われる。教員は受け持ち褥婦だけではなく、他の褥婦の情報も十分に把握して実習に携わることは当然のことであるが、学生に対しても他の褥婦の授乳状況などを説明することは学生の気づかいに配慮することになると考える。

また授乳場面での戸惑いとして、《見ているだけで役にたてなくて申し訳ない》、《居場所がない》、《お母さんの方がうまい》《助産師さんがいるから》《子どもを産んでない自分だから》という状況から学生は〈無力感〉を抱いていたのも特徴的であった。学生は授乳場面で、羞恥心があり、何かケアをしたいが緊張してしまい、自分の知識や経験では母親の授乳を援助するにはなかなか至らない。また、母親と子どもが触れ合っているときに、横はiriしてしまったり、母親のことを気づかい、自分の言動を気にする。このようなこともすべて無力感に通じるのではないかと考える。そして授乳場面では自分の出番がなかなか得られず、褥婦にとってプラスに働く役割がはたせない、自分のそこにいる存在感になかなか意義を見出せない、すなわち、授乳場面で学生が経験する戸惑いを考えてみると、その学生の状況を説明する中心的なカテゴリーは『居づらさ』ではないかと考えられる。

この場合の『居づらさ』とは、授乳場面で学生が感じた、〈羞恥心〉、〈触ることの緊張〉、〈何かしてみたいが自信がない〉、〈母子への横はiri〉、〈気づかい〉、〈無力感〉から続く、その場にいることを苦痛と感じる、心理的居場所が無い状態である。学生として、無力感を感じるようになると、授乳場面に居る自分の価値を見出すことが難しく、母子の相互作用が良好である親子に対しては申し訳なく思い、自分の存在を無くしたいと考えていたことから、逃げ出したくなるよ

うな居づらさへとつながってたと考えられる。

2. 授乳場面における学生の戸惑いに対する教員の考え方

看護学生にとって、授乳場面で経験していた戸惑いは『居づらさ』という特徴であることが考えられた。これまで教員として母性看護の実習の授乳場面では、学生が授乳場面へスムーズに入れるようにオリエンテーションや母親への依頼を十分に行い、学生が受け持つ母親へは、母親と学生がコミュニケーションをとりやすいように間に入り、学生と母親が理解しやすいようにケアの実際を手技を交えて説明を行い、学生がなるべく触診できるような機会もつくってきたが、授乳場面での学生の戸惑いや、『居づらさ』という面への配慮は不足していたのではないかと考える。羞恥心は、母性看護の特徴的なことであり、学生が感じる自然な姿であると考えていたが、インタビューをしたほとんどの学生が羞恥心を感じ、居づらさへと及んでいたことは新たな発見であった。慣れない場面で緊張し、自信が持てない、無力感を抱くなどのネガティブな感情が存在していたことから、学生の授乳場面への取組み方へ何らかの影響があったのではないかと考える。教員としては、今回明らかになったように、授乳場面で学生がこのような感情を抱いているということを十分認識して実習指導にあたることは非常に大切である。授乳場面に入る前に羞恥心などの、学生が経験しがちな戸惑いについて話をすることは、学生が「戸惑うのは自分だけではない」という気持ちになり、授乳場面へ入ることのストレスが和らぐのではないかと考える。実習の場では、常に学生の気持ちや受持ちの母親の心理などすべてを把握することは難しいが、授乳場面での表面的には捉えにくい学生の戸惑いの気持ちについて授乳の最中やその後、場所を変えて十分に表出できる機会を持つなどして、学生の体験している気持ちを理解することが必要であると考えられる。また今回、授乳場面で学生が居づらさを感じていたことが明らかになったことを十分認識し、この点について、教員として何ができるかを考えていくことが今後の課題であると考えられる。

VII. 結 論

母性看護実習における授乳場面で学生は戸惑いとして、〈羞恥心〉〈触ることへの緊張〉〈何かしてみたいが自信がない〉〈母子への横はiri〉〈気づかい〉〈無力感〉を経験していた。これらのことから中心となる学生の経験の特徴として『居づらさ』が見出された。教員として授乳場面で学生がこのような感情を抱いているということを十分認識し、実習指導に関わることの重要性が示唆された。

謝 辞

本研究を行うにあたり、インタビューを快く引き受けてくださった学生の皆さんに心より感謝いたします。

文 献

- 1) 野口眞弓：ケアの受け手の認識にもとづく母乳ケア過程。日本看護科学会誌, 19(3), 38-46, 1999
- 2) 納富昭子, 山本真紀子, 萩原美紀, 他：母性看護実習における看護学生の戸惑いとその対処行動。三重看護学誌, 3(2), 41-51, 2001
- 3) 中村啓子, 桜井文子：看護学生の母性看護実習における授乳場面での学生の心の動き。母性衛生, 33(4), 635-636, 1992
- 4) 前掲1)
- 5) M.H.Klaus, J.H.Kennell (竹内徹, 他訳)：親と子のきずな. pp. 85-119, 医学書院, 東京, 1985